

「大人になること」の行き詰まりと模索

——ベテラン・シェアハウス居住者に対する聞き取り調査から——

日本大学 久保田 裕之

1、 目的

若者の絶望や不安について語るとき、1) 社会的に望ましいとされるライフコースを辿りたくても辿れないことと、2) 社会的に望ましいとされるライフコース自体が揺らいでいることを区別するのは有益だろう。とりわけ後者の「アノミー的」な側面を無視すると、若者の軟弱化を嘆く懲罰的な「自己責任論」か、不幸な時代に生まれた若者への就労支援や婚活支援を含む「再分配・福祉拡充論」へと問題を矮小化してしまうことになる。注意が必要なことに、たとえば「就活」の名のもとに内定を巡る熾烈な争いに敗れるかもしれない不安の裏側では、本当にそうまでして会社に尽くすべきなのかが問われているのであり(橋口 2011)、たとえば「婚活」に駆り立てられる不安の裏側では、本当にそうまでしていま結婚すべきなのかが問われているのである。

こうした就職や結婚といったライフイベントを通過儀礼とする正統的なライフコースの現代的な困難と揺らぎ(Jones & Wallace 1992=1996)にかかわらず、マクロでみれば若者は依然として正統的なライフコースを望んでいる側面しか見えてこないかもしれない(石田 2011)。しかしその背後では、新しい働き方や新しい住まい方、新しい連帯の在り方を含むさまざまな生存戦略が試みられているのであり、この点に光を当てていくことも重要な作業であろう。

2、 方法

そこで、本報告では、「ベテラン・シェアハウス居住者に対する聞き取り調査」(2012年～)のデータを分析することで、長期間にわたって非典型的な居住形態で生活してきた若者が、これまでどのように生活を組み立て、現在の生活をどのように評価し、これからの生活に対する不安や展望についてどのように語るのかを明らかにしたい。具体的には、首都圏・近畿の大都市圏を中心に居住する20代～30代の若者のうち、家族や恋人と住むのでも／一人暮らしでもない非家族共同居住実践を4年以上実践している「ベテラン・シェアハウス居住者」5人に対して行った半構造化インタビューを用いる。

3、 結果・分析

分析の結果、制度的なサポートが乏しい中で社会的な理解の乏しいライフスタイルを実践する不安と同時に、長期にわたる試行錯誤の中で現実に機能してきた人間関係と共同生活の網の目は、生活の安定と将来への希望を当事者に与えていることがわかる。若者が現在に悩みを持ち、将来に不安を抱くこと自体が問題なのではなく、不安におびえ悩みを抱えるものの分断し孤立させるメカニズムを問題にしていくべきだろう。

参考文献

橋口昌治, 2011, 『若者の労働運動——「働かせろ」と「働かないぞ」の社会学』生活書院.

石田光規, 2011, 『孤立の社会学』勁草書房.

Jones Gill and C. Wallace, 1992, “Youth, Family, and Citizenship,” Open University Press (＝1996 宮本みち子監訳『若者はなぜ大人になれないのか——家族・国家・シティズンシップ』新評論).